

運動器疾患患者における入院時下腿周径を用いた栄養状態と機能的予後に及ぼす影響

タイトルは **12ポイント**(ゴシック体)。

2行分使ってよい。

○末吉勇樹¹⁾、村井直人¹⁾、□□□□²⁾³⁾、□□□□⁴⁾、□□□□⁴⁾

1) □□□□病院 □□□□部

2) □□□□病院 □□□□臨床研究センター

氏名(筆頭演者を一番左に記載)、所属、key words

は **10.5ポイント**(ゴシック体)。

所属が複数の場合、「上付き」(1)・(2) で番号を記載。

1 施設のみでは番号なし。

Key words □□□□、□□□□、□□□□

キーワードは必ず3つ選び、キーワード間には中点(・)を付けてください。

【目的】

近年、リハビリテーション(以下リハ)分野において栄養状態についての関心が高まっている。栄養と機能的予後の関連性について多くの報告があり、栄養状態の指標に下腿周径を用いた報告もある。一方、下腿周径を指標にして、回復期リハ病棟に入院した運動器疾患患者の機能的予後の関連を検討した報告は少ない。本研究の目的は、栄養状態の指標に入院時下腿周径を用いた際、退院時の機能的予後に及ぼす影響を明らかにすることである。

【方法】

平成30年8月から平成30年11月に当院回復期リハ病棟へ入院した運動器疾患患者を対象とした後ろ向き観察研究である。低栄養の定義として下腿周径が男性28cm、女性26cmをカットオフ値として群分けした。主要評価項目は退院時合計 Functional Independence Measure(以下FIM)、FIM利得、FIM効率の3項目とした。副次項目には在院日数、発症から当院入院までの期間、在院日数、入院時FIM、退院時FIM、FIM利得、FIM効率、在院日数、基本属性(年齢、性別、BMI)であった。なお、有意水準は $p<0.05$ とした。

10.5ポイント(明朝体)での入力をお願いします。**1000文字以内**で

作成。小見出し(目的、方法など)は文字数にカウントしません。

※例はホームページのPDFをご参照ください。

【説明と同意】

本研究は当院倫

【結果】

該当者は48名であり、低栄養群9名と対照群39名に分けられた。群間比較{低栄養群 vs 対照群}では、基本属性において年齢 82.9 ± 8.8 歳 vs 80.3 ± 11.6 歳、性別の割合は男性55% vs 21%、女性45% vs 79%であった。BMIは 20.8 ± 4.8 vs 22.3 ± 4.8 であった。疾患の内訳は、大腿骨頸部骨折44% vs 51%、圧迫骨折患者56% vs 41%であった。発生から当院入院までの期間は 29.3 ± 2.4 日 vs 19.5 ± 0.4 日、在院日数は 64.7 ± 5.7 日 vs 58.7 ± 4.4 日、入院時FIMは 65.5 ± 12.5 点 vs 65.5 ± 20.8 点であった。FIM効率(0.39 ± 0.24 vs 0.67 ± 0.44)に有意差を認めた($p<0.05$)。退院時FIM(93.4 ± 3.7 点 vs 99.7 ± 4.2 点)、FIM利得(27.8 ± 6.5 点 vs 34.2 ± 6.0 点)、在院日数、基本属性は全て有意差を認めなかった。

【考察】

下腿周径を用いて低栄養と評価された運動器疾患患者は、効率よくADLを改善させることが難しいことが示唆された。下腿周径は骨格筋量と相関があるとされている。低栄養の患者は栄養不良による骨格筋の減少に伴い、蛋白合成能の低下から筋力向上に時間を要したことが要因であると考えられる。本研究では、低栄養患者に対する運動療法を行う上で運動と栄養の両面からのアプローチが必要であると考えられる。

【理学療法学研究としての意義】

運動器疾患患者の下腿周径でみた低栄養は退院時の機能的予後に影響を及ぼす可能性が示唆された。これは回復期リハ病棟における栄養管理の重要性を示唆している。